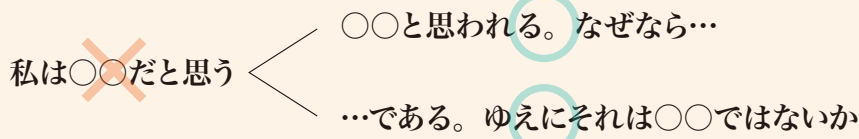


レポートの文章術

01 | 普遍妥当性を目指す

レポートや論文は、言語や文化の違いを超えて理解されること、つまり普遍妥当性を目指します。したがって、たとえ発想の根本に個人的な体験や思い入れがあっても、それらを直接表現することは控え、主張には客観的な根拠を挙げる必要があります。これが、作文や感想文との大きな違いの一つであるともいえます。作文では無根拠に「私は…と思った」と書いても許されますが、レポートでは違います。普遍妥当性を目指すには、そういう個人的な体験や感情を客観化・抽象化し、論拠を常に提示していくことが必要です。たとえば、「私は〇〇だと思う」は、「〇〇と思われる。なぜなら…」 「…である。ゆえにそれは〇〇ではないか」といったかたちになります。つまり、主語を“I”ではなく“It”（形式主語）として考え、心情ではなく論理によって考えるのが論文の思考法だといえます。

※先行文献や引用を示す時に人名を出す場合は、たとえ恩師であっても、敬称はつけません。

私は〇〇だと思ふ 

02 | 常体文を使用・表現に変化を

レポートでは原則として常体文(だ・である体)を使用します。「である」で止めるのが普通ですが、文末がすべて「である」だと単調になりますので、工夫が必要です。たとえば、レポートや論文では、以下のような文末がよく使われます。体言止めは使わない方がよいでしょう。

[～であろう。/～といえる。/～といえよう。/～と考えられる。/～と推測する(できる)。]

またレポートや論文は現時点での考察として示すものですから、「考えた」など過去形で書くのではなく、現在形で書くのが基本です。

同様に、原則として同じ言葉を安易に何度も使わないようにします。特に大切なキーワードであればやむを得ませんが、一般的な語なら類語を探して繰り返しを避けましょう。連続した文に逆接を重ねることはもちろん、一つの文に「……だが、……だが」と逆接をくり返すのは厳禁です。

03 | 「話し言葉の乱用」には注意

近年特によく見られるのは論文での話し言葉の乱用で、これは書き手自身が気づいていない場合が多いようです。たとえば接続詞ですが、つぎのような口語的表現は、後に示したような表現に直しましょう。「なので×→だから・それで△→したがって○」（順接）、「けど×→けれど・でも△→けれども・しかし・だが・にもかかわらず○」（逆接）。他に、「いまいち→いま一つ」「じゃない→ではない」などが目立ちますので要注意です。そうかと思うと、変に凝った言い

回しをしたり、故意に難しい漢字を使いたがったりする人もいます。文章は分かりやすく、平易に書くことをまず心がけましょう。

04 | 難読漢字は避けて、読みやすさを優先！

難読漢字・形式名詞(もの・こと・ところ、など)・副詞・連体詞などは、すべて原則としてひらがなで書きます。難読漢字は基準が難しいものですが、一般的でない難語をあえて使う必要はありません。ワープロソフトで文章を作成する場合、簡単に変換できるので、普段使わない漢字をわざわざ使う人が増えてきたように思います。「雁字搦め」「所謂」や「出来る」「無い」、「ということ」「というもの」の意味で使われる「こと」「もの」などは、ひらがなで表記します。

副詞は、「たとえ……でも」「もし……ならば」「まったく……ない」のような呼応の場合も、「もちろん」「かりに」「たとえば」「あるいは」などでも、連体詞では「この」「あの」「ある」など、すべてひらがなで表記することが現代では一般的です。

05 | 「たり」「とか」「の」

「たり」「とか」は、並列するものが複数あるときにしか使いません。その際、「走ったり飛んだり」「携帯電話とかコンピュータとか」というふうに繰り返して使います。「今の子はすぐ『やばい』とか言ったりするけど」という言葉が普通に感じられたら要注意です。

助詞の「の」は特に注意が必要です。「の」には単純な“of”の意味以外にも様々な使い方があります。「社会構造の変化の速度の問題」というふうに、つい多用してしまいがちですが、「社会構造における変化の速度に関する問題」などと言いかえましょう。

06 | 文章を見直そう！

一度書き上げた文章は読み直して、文章として問題がないか確認しましょう。内容や体裁のチェックポイントはp.41のとおりですが、文章表現としてはとくに以下の点に注意して推敲しましょう。

・読点の位置は適切か

読点は意味の切れ目を意識して付けます(息継ぎしたい場所ではありません)。「新しい留学生のためのプログラム」「新しい、留学生のためのプログラム」のように読点によって意味が変わる場合もあるので要注意です。

・長すぎる文章はないか

接続表現が3箇所以上あるような文、3行以上にわたる文は、途中で切れるところはないか検討し、2文に分けましょう。

・主語—述語の対応にねじれはないか

長い文章になると、主語と述語の対応に問題が生じることが多くなります。「この論文で指摘していることは~~~~~と述べている」「この問題の原因としては~~~~~によるものである」のような文章を書いてしまっていないか。

以上、よく見かける気になる表現を挙げました。大学生に相応しい、知的で論理的な文章が書けるように、語彙を増やし、表現力を磨いていきましょう。